

機関番号：17102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520293

研究課題名（和文） モデルネにおける神秘主義のポテンツ―グスターフ・テオドール・フェヒナーの系譜

研究課題名（英文） Potential of mysticism in modernity - Genealogy of Gustav Theodor Fechner

研究代表者

福元 圭太 (FUKUMOTO KEITA)

九州大学・言語文化研究院・教授

研究者番号：30218953

研究成果の概要(和文)：心理の動きを数量化する方法論の確立者として、今日ではもっぱら実験心理学の鼻祖の一人としてのみ記憶されているグスターフ・テオドール・フェヒナー(1801-1887)は、その実、心理学、哲学をはじめ、芸術一般にも深甚な影響を与えた思想家であった。本研究は翻訳がごく少数しかなく、またそもそも晦渋であるため、日本ではほとんど知られていないフェヒナーの思想を、特にその神秘主義的な傾向を軸に分析するものである。

研究成果の概要(英文)：Gustav Theodor Fechner (1801-1887) memorized only as one of the founders of the experimental psychology was a philosopher who had a deep influence not only upon the psychology and the philosophy today, but also upon the arts in general. Fechner is hardly known in Japan because of the difficulty of his text and of the deficiency of its translations into Japanese. This study is the analysis of the thought of Fechner especially concerning its tendency of mysticism.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：グスターフ・テオドール・フェヒナー、自然哲学、植物有魂論

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 報告者は平成17年度から19年度にかけて取得した科学研究費補助金により、ドイツの進化生物学者エルnst・ヘッケルの一元論について研究を進めてきた。ヘッケルが唱える一元論は、スピノザの「神即自然」の思想に淵源を持つ、自然神学的なものであった。

(2) 上記の研究に並行して報告者は、ドイツの物理学者・哲学者であるエルnst・マッハの「要

素一元論」に関する研究も行ってきた。これはウイーンのモデルネ文学に影響を与えた思想で、ヘルマン・バルや若き日のフーゴー・フォン・ホーフマンスタールにマッハ哲学の痕跡を認めることができる。

(3) ヘッケルとマッハの思想を分析するうち、この両者の一元論の背景にあるのがフェヒナーの神秘主義的な思想ではないかということに想到した。万物に魂の存在を仮定し、自然を神として

賛美するヘッケルの「賦霊論」も、物体・身体・精神をすべて要素の連関に還元し、自我をも解消してしまうマッハの「要素一元論」も、その祖形をフェヒナーの思想の中に見出すことができるのである。以上が研究開始当初の背景である。

## 2. 研究の目的

本研究は、日本ではほとんど注目されることのないフェヒナーの思想を分析することによって、生物学や物理学といった実証主義的自然科学の中から神秘主義的な思想が浮上する逆説を、ヘッケルやマッハをさらに遡って検証することであった。このようないわば「啓蒙の再神話化」の原型(Archetyp)をフェヒナーに求め、近代黎明期の自然哲学の水脈が、実証主義的自然科学を経由しながらモデルネの思想や芸術に浸透し、それが神秘主義へと反転するダイナミズムを追跡するというのが、本研究の目的であった。

## 3. 研究の方法

(1)ふつう3つの時期に区分されるフェヒナーの生涯(第Ⅰ期:生誕-1840年/第Ⅱ期:1840-1843年、重篤な神経症との闘病期間/第Ⅲ期:1843年以降、病氣克服ののちに神秘主義的な著作を爆発的に産み出していった晩年期)のうち、まずは第Ⅰ期に関して、クルト・ラスヴィッツ、ヨハネス・エーミール・クンツェ、ヴィルヘルム・ベルシェらのフェヒナーに関する評伝を読み、フェヒナーの生涯と思想の輪郭を描いた。

(2)その後、第Ⅱ期における重篤な神経症との闘病について、病そのものがどのような性質のものであったのか、また病気の前後でフェヒナーの思想に変化があったのかを、先行研究に基づき分析した。

(3)最後に第Ⅲ期執筆された著作、『ナナ、あるいは植物の魂の生活について』を詳細に分析し、フェヒナーの言う「植物有魂論」を俎上にのせることで、フェヒナー思想の独自性を浮かび上がらせた。

(4)なお報告者は平成21年にドイツ連邦共和国ライプツィヒ大学の大学図書館、文書館および大学付属フェヒナー協会に海外出張し、これが所蔵するフェヒナー関係の資料(書簡、日記、印刷に付されていない著作、フェヒナー関連の新聞記事や関連論文等)の閲覧および資料を収集した。またフェヒナー協会の会長であるアネロス・マイシュナー=メトゲ女史と会見し、協会が所蔵する新聞記事や雑記記事、19世紀中に公刊された論文等、日本では入手不可能な資料を複写することができた。

## 4. 研究成果

(1)下記の論文①「魂の計測に関する試論—グスターフ・テオドール・フェヒナーとその系譜(1)—」において報告者は「魂は物理学的に計測できるか」という問いを立て、フェヒナー思想の要に迫った。この一見荒唐無稽な問いは、その実、深遠な意味を含んでおり、長大な射程を持つものである。実証主義的自然科学が万能視された19世紀にあつてこのような問いを発し、「精神物理学」(Psychophysik)という新しい学問分野を開拓したのが、グスターフ・テオドール・フェヒナーである。「精神物理学」は、その言葉の成り立ちからもわかるように、心的なもの(das Psychische)を物理学なもの(das Physikalische)に翻訳しようとする営為である、とひとまずは定義できるであろう。精神科学と自然科学の閾(Schwelle)を軽々と越境し、独自の心身一元論を説いた思想家がフェヒナーに他ならない。

フェヒナーに関する浩瀚なモノグラフィーを書いたミヒャエル・ハイデルベルガーはオーケンの自然哲学を、デカルトの流れを汲む18世紀フランスの二元論、世界を時計仕掛の機構と見、生や意識を周縁的なものと位置づける世界観へのアルタナティブと見ている。フランスが「魂なきメカニズム」(seelenloser Mechanismus)であるとするれば、ドイツは「賦霊されたオーガニズム」(beseelter Organismus)だと言うのである。オーケンの著作に見られるように、ロマン主義的な自然哲学では、生と意識が生成、発展の相で捉えられ、その原初が無機的なもの、anorganischなものにまで遡及されるという特徴がある。このようなドイツ的自然哲学の初期におけるラディカルなケースがオーケンだとハイデルベルガーは述べている。オーケンは無機物から最初の有機的な「原初の粘液体」Urschleimが形成され、そこからより高度な有機物が「自発的」spontanに発生して人間に至るという進化論的モデルを打ち出し、このような発展こそが神の自己意識の覚醒であると考えている。オーケンの自然哲学このような神概念は、正統なキリスト教の教義から見れば異端に属している。ハイデルベルガーはこの「異端性」がのちのキリスト教批判、なかんずくダーヴィッド・フリードリヒ・シュトラウスやルートヴィヒ・フォイヤーバッハ、フリードリヒ・エンゲルスらに決定的な影響を与えたと指摘している。「自然は数学の言語で書かれている」と言ったガリレオから、デカルトを経由してニュートンによって完成された機械論的自然哲学は、特にフランスにおいて自然科学の精神的背景となり、哲学と科学が矛盾なく表裏一体となって自然科学万能の時代を招来した。ドイツにおいても自然科学は発展の一途をたどったが、自然哲学についてはフランス的な機械論が疑問視され、そのアルタナティブないしカウンターとして、ロマン主義的、有機体説的な自然哲学が勃興してきたと言えるであろう。ドイツにおいてははすな

わち、「実証主義的自然科学」と「ロマン派の観念論的自然哲学」の間に葛藤が生じることとなったのだが、これこそがフェヒナー個人の中で起こっていた葛藤に他ならない。フェヒナーはつまり、ドイツにおける自然科学と自然哲学の葛藤を一身に体现し、その縮図となっていたのである。換言すればそれは、神なき自然科学と、神学的ないし神智学的自然哲学の葛藤の縮図なのである。フェヒナーがとりわけ興味深いのは、このような思想史的コンステレーションの中にフェヒナーを定位することができるからである。

(2) 下記の論文②「フェヒナーにおけるモデルネの『きしみ』—グスターフ・テオドル・フェヒナーとその系譜(2)—」において報告者は、フェヒナーの生命をも脅かした重篤な神経症に関する先行研究を渉猟し、主要な病因の一つとして「ホーリスティックで調和的な世界把握(自然哲学)と、個別的で数学的・経験的な世界把握(自然科学)の分裂と葛藤をフェヒナー自身が体现していること」がある、という報告者自身の仮説を支持するいくつかの文献を紹介した。また晩年に神秘主義的な著作を次々と発表していくにあたって、それらの劈頭をかざる画期的な著作となった『ナナ、あるいは植物の魂の生活について』を詳細に分析し、フェヒナー独自の「植物有魂論」に関する1. 自然科学的根拠、2. 美的根拠、3. 目的論的根拠について分析した。「植物有魂論」はフェヒナーのはるか以前から、たとえばアリストテレスからの伝統があるが、フェヒナーのそれは自然科学的な根拠をも真剣に模索するという特徴がある。しながら一方、フェヒナーの叙述はきわめて詩的・文学的でもあり、ここにもフェヒナーの内面で起こっていた分裂や葛藤が体现されていると言える。『ナナ』はそれゆえ、例えばシュライデンなどの純粋に実証主義的な植物学者からは、厳しく批判された。「植物有魂論」を取るならば、必然的に「魂」の存在自体は承認され、「世界は魂に満ちている」という形而上的で自然神学的な問題を論じなくてはならない。独特な思想家フェヒナーを特定の系譜に定位することができるのであれば、スピノザから発するロマン主義的自然神学の後裔ということになるであろう。フェヒナーは「遅れてきたロマン主義者」だったのである。『ナナ』に関してはまた、その出版年がドイツに「三月革命」が勃発した1848年であることに注目し、まったく非政治的に見えるフェヒナーおよび『ナナ』とドイツの政治的混乱とのひそかな関連に言及した。

以上2本の論文を通して、本邦においては取り上げられることのきわめてまれなフェヒナーについて、少なくともその多様性の一端を紹介することができた。今後の展望としては、フェヒナーのまだ解明されていない部分を引き続き追跡・分析するとともに、フェヒナーの影響を受けた思想家や芸術家の系譜を辿ることが挙げられる。フェヒナーへ至る系譜に次いで、今後はフェヒナ

ーから発する系譜を下る作業を、今後の研究課題としたい。

(3) 報告者はまた、日本独文学会全国大会において「神秘主義的世界像と自然科学—もうひとつのモデルネ—」をテーマとするシンポジウムを他3名と企画し、司会と発表を行った。シンポジウムでは19世紀中葉から20世紀前半のドイツ語圏に現れたいくつかの神秘主義的世界像を取り上げ、それらを当時の自然科学との関連のなかに位置づけることによって、「モデルネ」を別様の光の中に浮かび上がらせることが試みられた。このシンポジウムで報告者は、自然科学的な合理性が世界把握の原則として絶対的な優位を占めていた19世紀の半ばに「魂は物理的に計測できるか」という問いを立て、実証主義的自然科学と、独特な神秘主義的信仰の間に整合性を見出そうとした思想家としてのフェヒナー像を打ち出した。それはすなわち、一般には非科学的とされる神秘主義的世界像と当時の実証主義自然科学的世界像の両者を架橋し、一身に体现しようとしたフェヒナー像の提示である。しかしそこには原則的な矛盾が生じざるをえなかった。この矛盾、換言すれば自然科学と自然哲学の、あるいは科学一般と哲学・文学・芸術のモデルネにおける「きしみ」を描出することを試みた報告者の発表には、盛んな質疑応答があった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

- ① 福元圭太、「フェヒナーにおけるモデルネの『きしみ』—グスターフ・テオドル・フェヒナーとその系譜(2)—」、『言語文化論究』九州大学言語文化研究院、第26号、2011、pp.1-21. 査読有  
全文テキスト・リポジトリ URL:  
<https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/handle/2324/19178>
- ② 福元圭太、「魂の計測に関する試論—グスターフ・テオドル・フェヒナーとその系譜(1)—」「かいろす」47号、2009、pp.33-48. 査読有  
全文テキスト・リポジトリ URL:  
<https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/handle/2324/16171>

[学会発表](計3件)

- ① 福元圭太、「植物の魂の生活について—グスターフ・テオドル・フェヒナーの系譜(2)—」、第88回九州トーマス・マン研究会、2010年6月26日、九州大学伊都キャンパス
- ② 福元圭太(シンポジウムの他の発表者は田村和彦、熊谷哲哉、門林岳史)、「モデルネにお

けるフェヒナーの『きしみ』、日本独文学会全国学会シンポジウム「神秘主義的世界像と『モデルネ』」、2009年10月17日、名古屋市立大学

- ③福元圭太、「グスターフ・テオドール・フェヒナーとその周辺」、科学研究費補助金研究発表会(基盤研究B)、研究代表者:浅井健二郎、2009年2月22日、九州大学人文科学研究院

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

福元 圭太 (FUKUMOTO KEITA)

九州大学・言語文化研究院・教授

研究者番号:30218953